

「鯨漁場建築」～鯨御殿とまり～

北海道泊村

泊村はかつて鯨漁で栄え発展した村であり、鯨漁を始めとする漁業と茅沼炭山(官営第1号)は現在の泊村の集落形成の礎となり、“袋澗”(鯨漁場遺構)等とともに随所にその名残がみられる。川村家・武井家は、ともに江戸末期から明治・大正期に泊村において鯨漁で一大事業を成した代表的な網元であり、「鯨御殿とまり」では当時の網元の暮らしぶりを垣間見ることが出来る。旧武井邸客殿・蔵は、大正4～7年頃に建築され、贅を尽くした材料と巧みな工・技法が見所で、かつては「離れ」として冠婚葬祭を中心として使用した。

川村家は代々、慶次郎を名乗った。二代目慶次郎(久太郎)は、青森県西津軽郡に出生し、弘化4年(1847)に北海道古宇郡泊村に居住、鯨建網を営み一大事業を成した。明治年間には泊・釜・興志内の3村の戸長を務め、三代目慶次郎(貞太郎)は明治末期、武井忠吉と共に雑用水水道工事を竣工した。

鯨番屋は、3代目慶次郎が鯨網2ヶ統の番屋として明治27年に建築(建坪144坪、木造桁葎2階付建屋)、漁夫溜70坪(116人収容)を有し、大正初期まで使用した。

武井家は代々、忠兵衛を名乗った。初代忠兵衛は青森県東津軽郡に出生、天保9年(1838)に北海道岩内港に渡り、数年後、茅沼村(現、泊村大字茅沼村)に居住した。漁業・炭焼等を営むが、後に鯨建網20余ヶ所、年間漁獲量が3万石に達し、明治40年代には樺太漁場15ヶ所を保有するに至った。岩内・古宇両郡で翁に資金を仰がないものは稀であったと言われている。



鯨御殿とまり付近からみた近隣漁場

【参考資料】泊村史、鯨御殿とまり展示関係資料他



旧武井邸(現在の鯨御殿とまりの客殿)

代が進むにつれ、泊村・茅沼村、岩内町で漁業の他、酒造業(建物は北海道開拓の村へ移築)、海陸産物問屋、採炭事業等、広く事業を展開することとなる。また、明治年間には武井忠兵衛らは茶津トンネルを開通。武井忠吉、田中福松(小樽市へ鯨番屋を移築)等数名で、当時難所であった兜岬のトンネル工事を竣工させた。樺太では、忠吉と、長女の婿養子松兵衛の3代目重治を中心に事業を展開し、重治は昭和6年(1931)に遊園地を開業している。

みどころ



- とまりん館：原子力PRセンター。原子力発電所の成り立ちやエネルギーの歴史、電力供給などを、パネル展示や映像を使ってわかりやすく紹介している。地域紹介の展示や展望ラウンジもある。☎ 0135-75-3001